

氏名	吉 永 泰 彦
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	博 甲 第 701 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 63 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科内科系内科学Ⅲ専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	慢性腎不全患者におけるインターロイキン1(IL-1)及びインターロイキン2(IL-2)産生能
論 文 審 査 委 員	教授 木村郁郎 教授 辻 孝夫 教授 折田薫三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

透析患者を含めた慢性腎不全患者における免疫不全の機序を明らかにする目的で、細胞性免疫機構で主要な役割を果している、単球によるIL-1産生能とT細胞によるIL-2産生能について、慢性腎不全患者29名(導入後8年以上の長期透析10名、3年未満の短期透析10名、非透析9名)及び健常人10名を対象として検討した。①lipopolysaccharide(LPS)刺激単球のIL-1産生能は慢性腎不全の各群で正常域($M \pm 2SD$)を越す高値例が散見されたが、各群の平均値に有意差は認めなかった。②phytohemagglutinin(PHA)刺激単核細胞によるIL-2産生能は透析患者で有意に亢進していた。単球による影響を除くためにT細胞のPHA刺激下でのIL-2産生能も検討したが、やはり透析患者で亢進していた。またこれとLPS刺激単球によるIL-1産生能との間には相関は認めず、透析患者にみられたT細胞のIL-2産生能の亢進に単球の影響は少ないと思われた。③無刺激単球によるIL-1産生能は各群とも平均 $1U/ml$ 以下であり、無刺激T細胞によるIL-2産生を認める例はなく、また培養前及び無刺激培養時のIL-2受容体(IL-2R), transferrin受容体陽性率はいずれも2%以下であり、透析患者の単球やT細胞がpreactivateされていた可能性は否定的であった。④IL-2反応性と、PHA刺激後のIL-2R陽性率は有意の正相関を示し、いずれも非透析患者で健常人に比べ有意な低下を示し、透析が長くなると徐々に回復した。腎不全、特に非透析腎不全患者における免疫不全の原因の1つは、このIL-2Rの発現不良に基づくIL-2反応性の低下にあると考えた。

論文審査の結果の要旨

本研究は慢性腎不全患者におけるインターロイキン1（IL-1）及びインターロイキン2（IL-2）産生能について臨床的に検討したものであるが、従来十分検討されていなかった腎不全患者の免疫不全状態について、透析患者ではIL-2産生能は亢進しIL-1とはあまり関係せず、又IL-2反応性とPHA刺激後のIL-2受容体陽性率は相関して低下し透析により徐々に回復し、その原因にIL-2反応性の低下を認め、重要な価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。